

粟

ヘリ、此種ハ和邦ニ未ダ見ヘズ、

〔多識編穀^三〕罌子粟、今案介志、異名御米、實象穀

〔書言字考節用集^六生植〕罌粟^ク草本^同米囊^同上御米^同上

〔大和本草^五〕罌粟 花單葉千葉紅白アリ、種品多シ、八九月ニ種ヲ下ス、單葉ノ白花ニ實多シ、千

葉ナルハ實少シ、千葉ナルヲ麗春花ト云、紅白紫淡濃品多シ、游點齋ガ花譜ニ、此花ノ美ナル事ヲ

詳ニイヘリ、群花ニヲトラズ愛スベシ、凡ケシノ苗ワカキ時、爲蔬テ食フ、味ヨシ、苗生ジテ後他土

ニウツシウヘテハ不榮、實猶青キ時根早ク枯ル、他草ニ異レリ、又實ヲ多ク貯ヘ置テ、炒テ飴品ニ

加ヘテ美味ヲ助ク、日用ノ嘉蔬ナリ、肥土ヲヨクコヤシテ和ニシ、種子ヲ釜下ノ灰ニマゼテマク

ベシ、蟻不食、救荒本草曰、隔年種則佳、又曰、取米作粥、或與麪作餅皆可食、

〔農業全書^四〕罌粟

けしは花の白き一重なるが實多くかうばし、料理には是を用る物なり、又花紅紫色々あり、是を

米囊花と云て、詩にも作れり、花殊見事にて、菜園にうへて尤愛すべき物なり、されども千葉の色

あるは實少なく、子の色も雜色にて料理によからず、蒔時分の事、秋の半いか程も地を細かにこ

なし、中分に肥し、畦を平らかによくならし、八月半比蒔べし、地を少た、き付て、薄く蒔たるがよ

したねを灰と沙に合せ、筋うへにても、ちらし蒔にても、各心にまかすべし、種子おほひはするに

及ばず、わらは、きにて、さら／＼とたねのかたまらざる様にはきをくべし、生て後芸り間引中

を度々かきあさり、ふとるに、えたがひて、段々正月までまびきて、菜に用ゆべし、又云、若むら生せ

ば蒔つぐべし、小きをへらにて、ほりて、移しうゆるも、生付物なり、人糞など多く用ひて、餘り肥過

れば、葉に虫付て、實らざる事もあり、冬中よき程に見合せ、糞し、培ひ、春雨の中たを、れぬ程にすべ

し、肥たる沙地におほく作りて、利あるものなり、但花の咲ころ、葉に出の付事おほきゆへ、よく心